

遠藤周作

生に上手
死に上手



海竜社

生き上手
死に上手
遠藤周作

海竜社



〈著者紹介〉

遠藤周作（えんどう しゅうさく）

1923年3月27日東京生まれ。慶応義塾大学仏文科卒。学生時代から『三田文学』にエッセイや評論を発表。55年『白い人』により芥川賞受賞。66年『沈黙』により谷崎賞受賞。代表作『海と毒薬』『おバカさん』『わたしが・棄てた・女』『死海のほとり』『侍』『スキャンダル』『叛逆』他多数。

生き上手 死に上手

平成三年三月二十七日 第一刷発行
平成九年四月一日 第二十一刷発行

著者 遠藤周作

発行者 下村のぶ子

発行者 株式会社 海竜社

東京都中央区築地二ノ十四ノ一（郵便番号）一〇四

電話 東京（〇三）三五四二一九六七

振替口座 〇〇一一〇一九一四四八八六

もし、落丁、乱丁、その他不良な品がありましたら、おとりに
かえします。お買い求めの書店か小社へお申しいでください。

印刷所 白陽舎印刷工業株式会社（二）

製本所 大口製本印刷株式会社

© 1991, Shūsaku Endō, Printed in Japan

生き上手 死に上手 — もくじ

自分の救いは自分のなかにある

マイナスのなかにプラスがある—— 8

無明のなかの光—— 15

マイナスを利用する—— 22

年をとるほど見えてくるもの—— 27

我々を包み、我々を生かす存在—— 34

死を受容するために—— 39

死に稽古 死に上手—— 46

人間の無意識の力—— 51

すべてをゆだねる—— 56

余白のなかの完成

余白のなかの完成—— 64

礼儀を知って損はない—— 71

人生の意味—— 76

宇宙の命を吸う—— 81

肉体は心と一体である—— 88

面従腹背の生き方—— 93

私はあなたの人生の傍役—— 98

夫婦の味—— 103

毒をもって毒を制す—— 107

医学は人間学—— 112

生活の挫折は人生のプラス

こわがり屋の死に方—— 118

老いの感受性—— 124

老年の生き方—— 128

老人と翁—— 134

人生は悲劇か—— 139

患者の切望—— 145

手を握りしめる—— 156

天の摂理とは—— 159

罪と惡——163

何一つ無駄ではなかった——170

よく学び　よく遊び

生き金——178

プロとアマ——183

講演の要領——186

早く気がつけばよかった——189

よく学び　よく遊び——192

女の論理——214

愛するとは——219

私の学校　私の先生——226

私の青春——237

兄弟——243

すべてのものには時季がある

言葉の力——246

縁の神秘——253

長い忍耐の時間があってこそ——258

風景は二度と帰らない——262

過剰包装のむなしさ——266

幼き日の大連——270

人間の哀しさを感じるとき——272

晦日の話——275

あとがき——281

初出一覧——282

ブックデザイン——勝井三雄
彫刻『夕べの花』——津田裕子

自分の救いは自分のなかにある

マイナスのなかにプラスがある

人生に起ることと利用できないものはない

長短はたがいに引き立てる（老子）

長さがなければ短さも成りたたぬ。短いということがあるからこそ長いという意味もある。

これは別に長短に限ったことではなく、この世の万相のすべてに当てはまることであり、我々の人生や幸や不幸にも適用できることだ。

不幸がなければ幸福は存在しないし、病気があるからこそ健康もありうるわけだ。だから両者はたがいに依存しあっているといえる。しかも不幸とよぶものにはピン、キリがあり、もっと不幸な人からみるとある程度、不幸な人はまだ「幸福」にみえるものである。末期癌（がん）の患者の眼には心臓病の患者は羨ましく見えるかもしれない。すべての価値概念はこのようにして相対的である。

老子だけでなく、多くの東洋思想や仏教がくりかえしくりかえし語っている以上のような考えかたは、結局、我々の人生には絶対的なものなどありはしないと言うことにつきる。

だが理屈ではこのことはわかっているのに、いざこの世のなかで生きていると、その都度、その都度で、情けないかな、眼先のことにどうしてもふりまわされてしまう。眼先のことだけが絶対になってしまう。

歯痛でくるしむ夜には、この歯の痛みが無限に続くように思えたり、全世界でこの苦痛を味わっているのは自分一人に感じられたりするものだ。上役に嫌味を言われたり叱しかられた日は、不快感や自己輕蔑けいべつの感情が胸をしめて、自分がこの世でとくにみじめな者に感じられてしまう。

いつだったか、禅の修行者と三、四人で話していた時、ある人が相手に逆らうようなことばかり言った。するとその修行者の顔に血がさかのぼってくるのがよくわかった。禅の修行者でさえ、怒りの感情にふりまわされ心を支配されていたのである。

そうしてみるとどんな人間の心にも、小さなことを絶対化してしまう傾向や癖があるらしい。病気の時は理屈ではこんなものは相対的なものだと考えようとしても、当事者の病人にはやはり「苦しくって、苦しくって」仕方がないのである。それは理屈や御説法ではどうにも処理できない場合だであるのだ。

凡人の私はだからそれこそ苦しまぎれにこういう方法をとることにしている。それには方法がある。

ひとつは病氣の時でも不幸な時でも、これを「利用して何とかトクすることはあるまいか」と考えることである。ふたつ目は病氣や不幸をユーモアにしてしまうやり方を考えることである。

私は病身だったので病氣を随分、利用した。負け惜しみではなく病氣を骨までしゃぶって、私の人生の三分の一は自分の病氣を利用することにあつたと言っている。かなりのトクをしたと思っている（トクとは決して物質的なことだけではない。精神的なものでもある）。そしてそれからどんなことでも人生に起るもので利用できぬものはないと思うようになっていゝ。人生の廃物利用のコツを多少は会得したつもりである。

マイナスのなかにプラスの可能性がある

誰が家に明月清風なからん

『碧巖録』^{へきがんろく}に出てくる言葉だそうだが、年をとってから私はこの言葉を自分流に解釈して

次第に好きになった。

文字通りにとれば、どんな家のなかも月はあかるく照らし、清風が吹き入るといふことだ

ろう。更に仏の慈悲は富めるものにも貧しきものにも差別がないということだろう。

同じような言葉が新約聖書にある。我々が神や仏の愛や慈悲を思う時、社会的な差を超えて平等なものだという考えは仏教にも基督教キリストにも共通しているのである。

しかし私はこの言葉をむしろ「自分流」に解釈している。

というのは私は若い頃、顔にこそ出さないが人間関係にたいして好き嫌いが烈はげしかった。

そしてその好き嫌いのために、決して悪気を私に持っていなかった人からも遠ざかり、あるいは傷つけてしまうという愚かしい過ちを何度も犯した。

しかし年をとるにつれ、多少の経験を重ねるにつれて私にも人生や人間についてわずかながら理解するものがあつた。

それは我々の人生で一時的にはマイナスにみえるもの（挫折さげす、病氣、失敗）にも必ずプラスとなる可能性があり、その可能性を見つけて具現化さえすれば過去のマイナスもいつかはプラスに転ずるということだった。

なんだ、そんなことか、とお笑いになるかもしれないが、情けないかな、私がこれを実感を持って知ったのは五十歳になってからだだった。

マイナスのなかにプラスあり、と同時にプラスのなかにマイナスがあるということは仏教が善悪不二というような表現でいつも言っていることだ。

今の私は人間関係でも同じように考えている。外見は氣にあわぬようにみえる人も、しばらく交際してみると、その味がわかるということとはよくあることだが、更に相手の欠点のなかにその人を生かしているプラスがないかを見るように努める、そしてそのプラス点を評価する。そういう考えかたで交際を終らせないだけでなく、本当に親しくなったことが何度もある。

どんな家にも明月はさしこむし、どんな人にもいい部分があるのだ、相手のいい部分だけを見よう、見ようとする夫人が私の仲間にいるが、その夫人から学ぶことが多いのである。

秘密を噛みしめると、見えてくるもの

誰にでも人に言えぬ秘密がある（正宗白鳥）

どんな人間にもそれを知られるくらいなら死んだほうがましだと言うような秘密がある、という意味の言葉を正宗白鳥の作品から読んだ時、私はわが意を得たという気持と共に、さすがは白鳥だと尊敬の念をますます深くした。

その通りである。どんな人間にもそれを人に知られるくらいなら死んだほうがましだと思ふほどの秘密が心の奥にかくされている。そしてその秘密は別に人を殺したとか、何かを盗んだという種類ではないが、当人にとっては思いだすのも苦しい秘密かもしれない。何だ、

そんなことかと他人は考えるかもしれないが当人には噛みしめるのが実に辛い秘密なのだ。

心療科の医師たちは時にはその秘密を患者の口から告白させることによって、その肉体にあらわれた症状や神経の狂いを治療することがあるが、多くの人間はそういう症状が肉体に出ないから、自分一人でその秘密をまるで近よってはならぬ暗い洞穴のように一生のあいだ持ちつづけて生きていくだろう。

しかし、人生が本当は営まれているのはこの暗い洞穴のなかである。我々が自分に正直になり、神とむきあえるのも、この暗い洞穴のなかにおいてである。

人には言えぬ秘密。しかしそれは神は知っている。知ってはいるが——多くの人がおびえるように、それによって神は怒ったり裁いたりはしない。むしろその秘密があればこそ人間はやがて神を求め、神を探り、神をほしがることを知っているのだ。——そう、私はこの頃、思うようになった。

「俺にはそんな、やましい秘密などない」「わたくしにもそんな恥ずかしい秘密などない」とこれを読まれて思われた読者がおられれば、私は一方では羨望を感じることが、他方では、その人たちは何というつまらぬ表面的な人生しか持たなかったのだらうと考えるかもしれません。

「人には言えぬ秘密」を心に持った者はそれを噛みしめ、噛みしめ、噛みしめるべきである。そうすれば本当の自分の姿もおぼろげながら見えてくるだろうし、その本当の自分の姿から

生き方の指針が発見されるだろう。

だから、むしろその秘密に我々は感謝してよいのだ。そしてそれを噛みしめることで、少なくとも我々はこの世のなかの最もイヤな偽善者——いつも自分を正しき者として他の人を裁く偽善的道德漢にならずにすむのである。

正宗白鳥のこの言葉は実に深い。この言葉から色々なことを考えるが、今日はその一つをのべてみた。